

## 教育実習の時期と期間についての検討

—2020年度入学生への調査結果を基に—

村井尚子  
(教育学科教育学専攻)

宮崎元裕  
(教育学科教育学専攻)

森久佳  
(教育学科教育学専攻)

本学では、2019年度生から教育実習の在り方を根本的に見直し、1年次の附属小学校観察実習に始まり、2年次での2週間の附属小学校実習、3年次での3週間の出身地小学校実習を導入した。実際に実習に参加した学生が自身の実習体験をどのように捉えているのかを調査検証し、今後の実習の在り方を検討するために、教育実習論Ⅱ(3年次通年科目1単位)の授業において振り返りと共にアンケートを実施した。本稿では2020年度生の調査結果について検討を行う。

キーワード：教育実習，実習期間，実習時期，実習での学び，実習の進路への影響

### 1. はじめに

#### 1) 問題の所在

今日、我が国の教育実習は、事前・事後指導の1単位に加え、幼稚園・小・中学校では4単位(120~180時間：3~4週間程度)、高校では2単位(60~90時間：2~3週間程度)で構成されている。教育実習の実施時期は、教員養成大学・学部の場合だと大学3年次、一般大学・学部では大学4年次に実施されることが多い。また、一部を「学校体験活動」(学校における教育活動その他の校務に関する補助や放課後・休日等の学習その他の活動の補助などを体験する活動)で代替することも可能となっている。

しかし、新型コロナウイルス(COVID-19)による甚大な影響を受けて、教職課程を有する全国の大学では、教育実習が中止ないし縮小して実施された。その際、オンライン実習の開発などさまざまな創意工夫が各大学で編み出され<sup>1</sup>(例えば、坂井他2022; 森他2022、参照)、実施されるに至った。こうした事態から、今日、教育実習の意義が改めて問い直されていると言えよう。

京都女子大学発達教育学部教育学専攻は1949(昭和24)年から小学校教員養成を行って

おり、専攻のカリキュラム自体が小学校教諭一種教員免許状を取得することを前提としたいわゆる目的養成のかたちをとっている<sup>2</sup>。本課程にかかわる教育実習を受け入れることを目的として創設された京都女子大学附属小学校があり、学生は3年次の2週間の附属小学校実習(いわゆる附小実習)と4年次の2週間の出身地の小学校の実習の二種類の教育実習を経験してきた。

2019年に新しいカリキュラムを作成するにあたって、2で示すように実習の形態を根本的に変更する試みを行った。本稿では、この試みの成果と課題を明らかにするために、学生へのアンケートを基に分析を行う。

#### 2) 研究方法

教育実習論Ⅱ(3年次前後期開講：幼稚園及び小学校教職課程必修科目)の6回目から8回目(2022年12月1日・8日・15日)の授業において実施したアンケート調査を基に分析する。なお、受講生には「個人情報分からない形で本学の教職課程をよりよくするための研究として使用させていただくことがあります」と文面及び口頭で確認の上、調査を行っている。調査に当たっては京都女子大学の授業システムであ

る LMS のアンケート機能を使用した。質問項目は以下の通りである。

3) 質問項目

実習先は母校でしたか？
実習先の都道府県、市町村を書いてください。例) 京都府京都市、京都府久世郡久御山町 など
出身地実習1週目の実習内容と学びを書いてください。
実習2週目の実習内容と学びを書いて下さい。
実習3週目の実習内容と学びを書いてください。
実習4週目の実習内容と学びを書いてください。
4週間の学びの物語を書いてください。
同時期に来ている他校の実習生はいましたか？いたとしたら何回生 <sup>3</sup> でしたか？
実習の時期や期間（3回生で実習すること、4週間という期間）について校長先生や担任の先生などからなにか言われたことはありますか？あれば書いてください。なければ「なし」で回答してください。
実習時期と期間として望ましい形態はどれだと思いますか？その理由も教えてください。
2回生の時に附小の先生から指導を受けた指導案の指導について感想を書いて下さい。
教員になろうと考えていますか？
現時点での進路選択に3年次での教育実習は影響を与えましたか？どんな影響でしょうか？

紙幅の関係上、上記の質問項目のうちのいくつかについては本稿では扱わない。

2. 本学の教職課程カリキュラムと教育実習

我が国の教育実習期間は、他国の教員養成のカリキュラムと比べて非常に短いという課題<sup>4</sup>がある。例えば、オーストラリアのクイーンズランド工科大学の初等教員養成カリキュラムで

は、1年次から4年次まで計7回実施され、合計実習期間は、100日を超える。また実習先も特性が異なる複数の学校で実施し、多様な現場を体験することが重視されている<sup>5</sup>。

上述の3年次2週間附小実習、4年次2週間出身地実習のカリキュラムに関して、①4年次の母校の実習が2週間では、子どもの名前やクラスの様子を理解し、十分な研究授業を実施するには期間が短かすぎるのではないかと、②4年次に実習を行うのは時期的に遅いのではないかと、③実習の事前指導の授業が2年次に配置されており、実習の事前指導、事後指導としての役割を十分に果たせていないのではないかと、④特別支援学校教諭の免許課程を導入するにあたり、特別支援学校の実習を4年次に入れるために小学校実習は低学年に置いたほうがカリキュラム的にも問題が少ないのではないかと、といった議論がなされ、以下のようなカリキュラムを編成することとなった。

表1 京都女子大学発達教育学部教育学科教育学専攻における教員養成カリキュラム

	前期	後期
1年次	オリエンテーション	事前指導→附小観察実習①→省察→(2年次へ)
2年次	省察・事前指導→附小観察実習②→省察・指導案作成→(後期へ)	事前指導→附小実習(2週間)→省察・事後指導→(3年次へ)
3年次	省察・事前指導→(後期へ)	事前指導→出身地の幼小実習(3週間)→省察・事後指導→(4年次へ)
4年次	省察・事前指導→中高・特別支援学校実習(希望者)→省察→(後期へ)	教職実践演習(4年間の学びを踏まえて)

## 教育実習の時期と期間についての検討

本学では法定の実習期間よりも長めの期間を設定し、附属小学校の観察実習（半日と1日）、附小実習（2週間）、出身地の幼稚園もしくは小学校の実習（3週間）という4度の実習を中心に据えながら、実習とリフレクションの相補性を保つために、省察・事前指導→実習→省察・事後指導というサイクルを基本に据えたカリキュラムを編成した。3年次までに小学校（幼稚園）実習を終えるように設計したのは、一つには、4年次の6月から8月にかけて実施される各自治体の教員採用試験までに小学校・幼稚園の教育実習を終えておくことで、「自身が本当に教師になりたいと考えているのか」、「どのような教師を目指すのか」といったマインドセットをもって採用試験の準備に臨むことを重視したためである。また、希望者が取得している特別支援学校教諭免許および中学校・高等学校教員免許取得のための教育実習を無理なく4年次に設定することも可能となった。

この実習時期の変更に合わせて、3年次の実習までに小学校教員免許関係の科目の大半の履修を終えられるように、カリキュラムの変更も行った。

ただし、新しいカリキュラムを導入した2019年度生が1年次の冬に新型コロナウイルス感染症禍が始まり、教育実習のあり方にも大きな影響が出た。まず、2020年度に予定されていた附小観察実習（2020年度入学生）、2年次附小実習（2019年度生）が中止となった。2021年には2019年度生が前年度に中止となった附小実習をオンラインのかたちで実施したが、後期になって新型コロナウイルス感染症の状況が悪化したこともあり、2020年度生の2年次附小実習は中止となった。このため、2020年度生は後述のように、附小実習には参加しないまま、2022年度に出身地実習に参加することとなった。

表2 2019年度生以降の教育実習の状況

2019年度入学生		
2019年度	1年次附小観察実習	実施
2020年度	2年次附小実習	中止→3年次の5月にオンライン実

		習として実施 <sup>6</sup>
2021年度	3年次出身地実習	3年次前期から後期に移行して実施
2022年度	4年次特別支援および中高実習	通常通り実施
2020年度入学生		
2020年度	1年次附小観察実習	中止
2021年度	2年次附小実習	中止
2022年度	3年次出身地実習	附小実習が中止になったため、期間を延ばして実施
2021年度入学生		
2021年度	1年次附小観察実習	通常通り実施
2022年度	2年次附小実習	通常通り実施
2022年度入学生		
2022年度	1年次附小観察実習	通常通り実施

### 3. 結果と考察

以下に、小学校実習参加者のアンケート項目ごとの結果を記し、考察を行う。

#### 1) 実習先

まず、3年次の出身地の実習先の小学校が母校かそれ以外かという質問に対しては、母校であると答えた回答が94%と圧倒的に多数であった。本学の学生が実習を行うことの多い京都市や神戸市は教育委員会が配当を行うことになっているが、それ以外の地域では母校に実習を依頼することが多い現状である<sup>7</sup>。

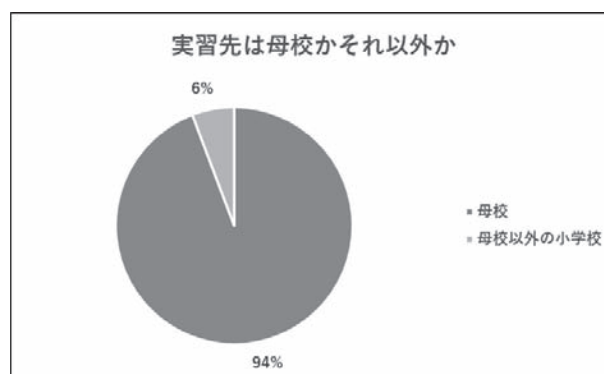


図1 実習先が母校であるか

さらに、実習先の所在地を聞くと以下のよう

になっている。本学は全国から学生が入学してくるという特色があるが、実習先を見ても、北海道から九州と大変多岐にわたっている。それぞれの地域ごとに教育実習に対する取り組みも異なっていることが予想されるが、本稿ではそこまでの分析は行っていない。

表3 実習先の所在地

北海道	北海道 1			
東北	福島 1			
関東	東京 1			
中部	静岡 2	長野 1	石川 1	富山 2
	福井 3	岐阜 1	愛知 2	
近畿	京都市 7	京都府 7	滋賀 9	
	大阪府 10	大阪市 6	兵庫 7	神戸 2
	奈良 4	和歌山 2		
中国	島根 1	鳥取 2	広島 4	山口 1
四国	香川 3	愛媛 2	高知 2	徳島 1
九州	熊本 1	佐賀 1		

## 2) 実習を行った学年

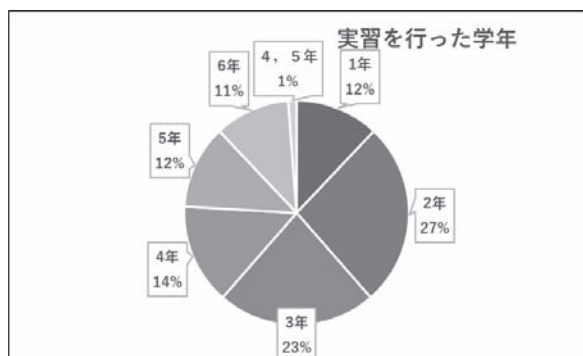


図2 実習を行った学年

実習を行った学年については以下の結果となった。2年次に実施する予定であった附属小学校実習では、きょうだい関係やアルバイト先の学習塾などでの関係に配慮しながら、大学側で配当学年を決定しており、1年から5年までの各クラスに等分した形で実習を行うことになっていた。受講生たちはそれぞれの配属先において実地授業を行う予定で指導案の作成を2年次前期から進めており、実習の中止が決定した後

に、各クラスの担任教諭から指導案への助言指導を受けた。3年次後期の出身地実習に関しては、実習先の小学校との相談という形をとっている。結果的に、2年生で実習を行った学生が最も多く27%が、次に3年生が23%、続いて4年生が14%、1年生と5年生がほぼ同じで12%、6年生で実習を行った学生も11%いた。複式学級で4年生と5年生に入ったという学生も1名いた。少し古い資料ではあるが、深田は、小学校における担任学年配置において「女性教師は低学年向き」という固定観念があると指摘している<sup>8</sup>。また、黒田らは、低学年に女性教師の比率が高く、高学年や管理職において男性が増加するというステレオタイプが学校の慣行や慣習に潜在する男性中心主義に繋がっていると指摘している。本調査は教育実習の配当学年であり、これらの研究結果と直接的な関連は無いともいえるが、約62%の実習生が3年生までの学年で実習を行っていることは興味深い。低学年が実習生にとって適切な学年であると考えられているのか、女子学生であるから低学年に配置されたのかは今後引き続き検証していきたい。

## 3) 実習期間

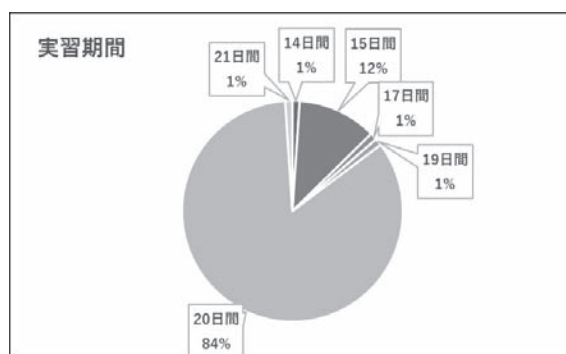


図3 実習期間

小学校教諭1種免許状取得に関わる教育実習の単位は教育職員免許法施行規則において5単位と定められている<sup>10</sup>。本学では学校インターンシップ（学校体験活動）を含まない形で2年次の附属小学校実習2単位、3年次の出身地実習3単位を必修としている。2020年度入学生は2年次の附属小学校実習が中止と決まった時点で、すでに内諾を得ていた出身地実習の実習先

## 教育実習の時期と期間についての検討

小学校に実習期間の変更の依頼を行った。結果的にもともと予定していた3単位3週間の実習期間のままの学生が12%、新型コロナウイルス感染症禍における諸事情等で17日間、19日間、14日間といった期間となった学生もいる。もとより、20日間に伸ばしてもらえたとしても課程上は5単位となっているため、単位数が不足してしまうこととなる。そのため、すべての学生が「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令（令和3年文部科学省令23号）」、いわゆる「教育実習特例」に基づいて代替を行うこととなる。「教育実習の科目の総授業時間数の全部又は一部を大学等が行う授業により行うことができることとする」という文言に基づき、履修指導の上、代替措置を実施することで必要単位数として読み替える。

### 4) 実習期間中の実習内容と学び

実習期間が14日から21日と幅があるが、それぞれの期間の範囲内で「実習1週目（～4週目）の実習内容と学びを書いてください」とし、自由記述を求めた。本稿では記述内容のなかで代表的な項目を挙げることでそれぞれの時期の実習内容と学びについて比較を行う。

#### ①1週目

##### 【実習内容】

- ・指導教諭の先生の授業見学
- ・クラスの様子、児童の実態の把握
- ・担当学級以外の学年や学級の授業見学
- ・支援が必要な児童への対応
- ・特別支援学級の見学
- ・校長先生等からの指導講話で学校教育、服務、生徒指導、小学校の組織のお話や保健指導、人権教育等について聞いた。
- ・学校の校務分掌
- ・児童の委員会、部活動の見学
- ・ICT利用研修、救急法研修
- ・登校指導
- ・自己紹介とミニゲーム
- ・実地授業実施

##### 【学び】

- ・指導教諭の授業における問いかけや授業構成、授業の導入部分
- ・学級運営や声掛け、視覚支援の取り入れ方の工夫
- ・学級による雰囲気の違い、子どもとの距離の在り方の違い
- ・自身の授業に生かせるような児童の特徴の捉え方。
- ・児童の授業中の発言などから自分には思いつかない行動や考え方に触れ、児童の柔軟さを感じた。
- ・向こうから寄ってきてくれる子とばかりかかわってしまい、他の児童とのかかわりが少なくなってしまう問題に気づいた。
- ・小学2年生の子どもから見れば実習生ではなく、一人の先生であるということわかり、先生としての責任とあり方を学んだ。
- ・先生の何気ない一言が実は大きな意味を持っていて、子どものやる気、興味・関心を高めていることに気がついた。
- ・指導教諭の先生の対応から、トラブルが起きたときに片方の言い分だけでなく、両方の言い分を聞く子との大切さを学んだ。

1週目は校長先生ほか管理職の先生からの講話を聞き、「学校」がどのようなところかをまず知るところから始めた実習生が大半であった。授業観察においては、配属学級の観察を丹念に行った実習生やその他の学級、学年、特別支援学級等を回らせていただき観察を行った実習生などそれぞれの学校の方針によって異なっていることが分かる。また、自己紹介やミニゲームをするなどして学級の子どもたちとなじむための実習を取り入れていただいている場合も多かった。1週目から授業を行った実習生も18名（87名中）いた。実習開始以前から学生ボランティアで学校に通っており、状況が良くわかっている場合が多いが、実習で初めて（母校ではあるが）訪れた場合でも授業を行っていた学生もいた。授業を初めて行ったのは1週目の最終日という回答もあれば2日目からという回答もあり、学校によってさまざまであることが分かる。



②2 週目

【実習内容】

- ・一週目に引き続き、主に授業観察
- ・2 週目からは他学年の授業を観察する機会も増えた。
- ・授業研究が始まった。
- ・指導案作り
- ・実習 2 週目からは実践授業を行う機会が徐々に増えていった。
- ・机間指導や授業についていけない児童のサポート、休んでいた子どもたちのサポート、自身での授業実践を行うなど、積極的な授業参加を行った。
- ・授業だけでなく、給食や掃除の時間も積極的に子どもに必要な支援を行った。
- ・授業はもちろん、日常のいろいろな場面で任せてもらうことが多くなった。
- ・研究討議会に参加
- ・図書時間の読み聞かせ
- ・校外学習の引率
- ・終礼
- ・保護者の授業参観に参加

【学び】

- ・担任の先生の授業の流れを捉えたり、どんな言葉選びで発問しているのか、板書の仕方はどうかなど授業を進める上で基本となる教師の動きを学んだ。
- ・先生によって児童の対応は全く違うことを知った。
- ・他学年の授業見学をして、発達の違いによる授業の進め方の違いや関わり方の違いを学んだ。
- ・実際に授業を行ってみると、指導案通りに進まなかったり、子どもの発言を引き出そうと自分が喋りすぎたりしました。どのような授業をすれば子どもの学びが深まるのか考えることができました。
- ・実際に子どもの前に立つと自分が授業を進めていくのに精いっぱい子ども反応を見て、つぶやきを拾うことができていることに気づきました。

- ・初めての実地授業では、授業が予定調和にはいかないと感じ、臨機応変な対応が常に求められることを実感した。
- ・子どもたちのかかわり方において、自分からあまり話しかけてくれない子に積極的に話しかけたり、一緒に遊ぶことで心を開いてもらえるのだと学ぶことができた。

2 週目も引き続き授業観察を行っている。1 週目と比べると観察の視点も深まってきていることが分かる。また、他の学年やクラスの授業を見せていただく機会も増えている実習生が多い。他の学年や教師の授業を見ることで、子どもの発達の姿やそれに合わせた授業の行い方を知ったり、教師によって子どもとの関係性や子どもの対応、授業スタイルが異なることを学んでいる。

ほとんどの学生が2 週目から実地授業（授業実践など呼び名は様々である）を行っている。授業を進めることで手一杯になってしまうという現状、指導案通りに進まないという事実気づくのも実際に授業を行うからこそその経験であると言える。臨機応変な対応が常に求められることを学んだという声もあった。

また、子どもとの関わりについての省察も徐々に深まってきている。

③3 週目

【実習内容】

- ・三週目からは一日に 1.2 回のペースで授業を行った。
- ・7 時間目の研究授業にむけて、1～6 時間の授業を任せていただいた。
- ・3 週目になると研究授業の日程が確定し、それに向かっての実践授業も徐々に増えてきた
- ・研究授業の実施と授業研究会（地域によって呼び名が異なる）。
- ・T1T2 の形で理科、音楽の授業をした。
- ・朝の会をまかせてもらった。
- ・遠足などの行事への帯同と反省会への参加。
- ・先生方の会議に参加させてもらった。

## 教育実習の時期と期間についての検討

- ・初任者研修への参加
- ・最後のお楽しみ会では、様々なプレゼントや企画をしてくれた。

### 【学び】

- ・授業に慣れてきたので、次はよりよいものにしようと工夫した3週目。
- ・発問は自分が伝わると思っている、子どもには伝わりきっていないことがあり、言い方を変えたりして、伝わりやすい言葉選びを知ることができた。
- ・授業において、早く課題を終わらせた子どもへの対応を考えておくことの大切さ。
- ・自身が大学でしてきた模擬授業で想定していた児童観よりもはるかに理解できていない児童が多くいた。
- ・目の前の子どもたちに合った授業をする必要性を学んだ。
- ・研究授業を考えるうえで、改めて指導案の作成の仕方を学び直すことができました。目標と評価にずれはないか、めあてとまとめがずれていなかなど。
- ・避難訓練では、初めて先生側からの視点で参加した。先生方のとても真剣な姿がとても印象に残った。児童に命の大切さや、真剣に取り組むことの大切さを伝え、なぜ避難訓練をするのか考えながら取り組めるようにすることが重要だと学ぶことができた。
- ・行事をするにあたって、先生方が多くの時間をかけて準備していること、子どもたちが安全に活動できるよう色々と配慮して行動していることを学んだ。

3週もしくは4週の間には授業を何回実施させていただいたかはかなり個人差が大きい(授業回数については挙手で尋ねたが、今回のアンケート調査では質問項目として取り扱わなかった)が、多くの学生は授業実施にも慣れ、自身の授業をより良いものに改善しようと努める段階に入ってきている。「子どもに伝わりやすい言葉選び」や「理解度の個人差」、「目の前の子どもに合った授業」といった記述が多かった。大学での模擬授業では得られない経験の貴重さを感じ

ている。

研究授業を行った学生、研究授業に向けての準備を進めている学生も多い。「改めて指導案の作成の仕方を学び直した」という記述からも分かるように、実践をすることで大学での学びが広がり深まる経験となっていると言えるだろう。朝の会の担当や遠足、避難訓練、反省会への参加の経験は、それまでの生徒の立場での参加から教師の立場としての参加によって、学びの質が高まっていることがうかがえる。

### ④4週目

#### 【実習内容】

- ・研究授業に向けて隣のクラスでの授業実践をさせていただいた。
- ・研究授業の実施と授業研究会
- ・一日実習(朝の会から終わりの会まですべての授業を含めて担当)
- ・他学年の研究授業の見学
- ・学校行事の運営
- ・大学の先生とのzoomによる教員研修に参加
- ・ありがとうの会(ゲーム、クイズ、プレゼント交換など)

#### 【学び】

- ・教育実習の集大成としてこれまでの授業実践での経験を活かして授業を行うことができた。
- ・児童が主体的な学びとなるよう、心がけたが、反応が良い授業もあれば、反応が良くない授業もあった。反応が良くない授業は私の伝え方が分かりにくかったり、問題が難しかったり、反省点がたくさんあった。
- ・自分では見つけることができなかった課題や、子どもたちの反応を事後研究会で教えていただいた。
- ・学校行事を行う時に、学校全体でどのように運営していくのか、コミュニケーションの重要性を感じた。
- ・子どもたちとの距離もだいぶ縮まり、机間指導や給食の時の関わり方などにもだいぶ慣れてくることができた。

・子どもたちが嬉しそうな顔をしているのを見るのがやはり最も幸せを感じるなど思った。

・子どもとの信頼関係は毎日の自分の行いで変わってくる。

・教育実習生という立場ではあるものの、1か月という短い間での子どもたちへの影響力がどれほど大きいものかを学ぶことができた。

「実習4週目は教育実習最終週ということで、仲良くなった子どもたちとお別れが近づいているという寂しさの中、研究授業やそれに向けた教材研究に取り組んだ」という実習生の記述が4週目の実習のあり様を端的に表していると考えられる。

ほとんどの学生が4週目に研究授業を実施している。研究授業に向けての準備、当日の本番もさることながら、その後の研究協議会（これも学校や地域によって呼び名が異なる）に参加し、授業を見に来られた先生方からたくさんの意見をいただいて大変参考になったという回答が多かった。

また、一部ではあるが一日実習を行ったという学生もいた。教師の立場で朝の会から終わりの会まで責任をもって取り組むことで、さらに意欲と達成感が高まったようである。

他には、学校行事の運営に携わったり、先生たちの研修に参加したりという経験もしている。

お別れ会では、4週間という短い間ではあっても子どもとの関係が構築されているということに改めて振り返る機会ともなっている。「子どもたちへの影響力がどれほど大きいものかを学んだ」という回答がそれを示しているだろう。

図4に、4週間の学びの内容をまとめた。

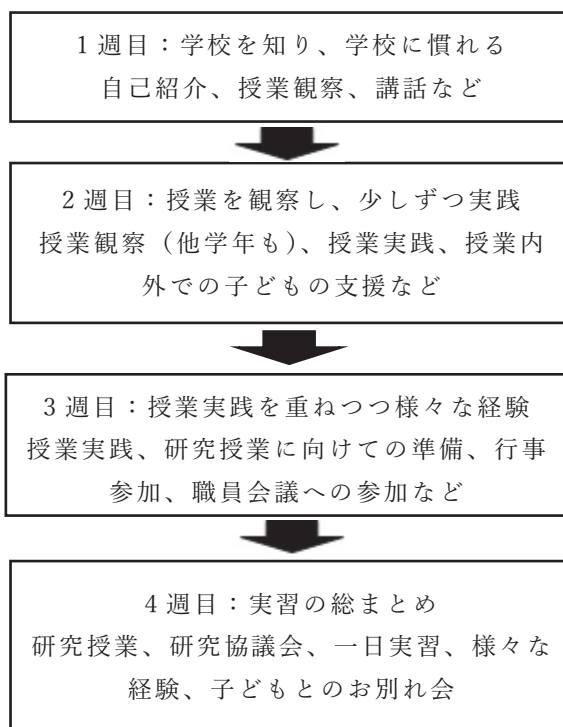


図4 4週間の学びの軌跡

#### 5) 同時期に他校の実習生がいたか

同時期に他校の実習生がいたかという質問に対しては下表のとおりであった(なお、社会人、大学院生に関しては他の回答と重複あり)。87名中50名は他校からの実習生はおらず自分一人という結果であった。残りの37名はいずれかの学年の実習生と同時期に実習を行っていたことが分かる。ただし、実習生によって実習期間が異なるため、一部期間が重なっていたという回答も多かった。

実習の学年としては、本学と同様に3回生で行っている場合も19件(合計数)あったが、4回生は24件とさらに多くが参加していた。社会人、大学院生も実習に参加していたという回答も複数件見られた。

表4 他の実習生の存在

他の実習生	(件数)
自分のみ	50
短大2回生	1
3回生	9
4回生	14



## 教育実習の時期と期間についての検討

3, 4 回生	10
社会人	5
大学院生	2

6) 実習時期と期間についての実習先の先生からのコメント

3 回生で 4 週間（一部 3 週間）という時期と期間について実習先の先生からコメントがあったという回答は 16 件あった。

- ・ 3 回生で行うことについて、一般的な時期より早いと言われることが多かった。
- ・ 4 週間あるから慌てずにゆっくりやってくれるねというようなこと、9 月ごろの実習だと運動会の練習ばかりになってしまうから 6 月がいいねというようなことを指導教諭の先生がおっしゃっていました。
- ・ 4 週間ということで、時間をかけて学べし、学校からしても実習生と関係を深めながら実習を行うことができるとおっしゃっていました。
- ・ 4 週間は長いと、大変だと言われました。
- ・ 9 月に希望する学生が多いため、6 月で助かったと言われた
- ・ とても良いタイミングだねと言われました。
- ・ まだまだ勉強中だという意味で、校長先生から「4 回生かと思っていたけど、3 回生なら、まだ履修中の必修の授業もあるんだね」と言われた。
- ・ 早くて良い、教採に集中できてよいとおっしゃっていた。
- ・ 担当の先生も 3 回生で実習をしたとお話されていた。4 週間は他大学よりも長く、驚かれていた。

時期としては 9 月よりも 6 月のほうが運動会と重ならない、他の実習生と重ならないという点で肯定的な評価が多かったようである。3 回生という時期は一般よりも早いと言われることはあったようであるが、教員採用試験のことを考えて適切だ、という声もあった。目的養成の場合は 3 回生で実習に行くことも多いと思われ

るが、実習校側に 4 回生で実習というこれまでの意識があると言えるのかもしれない。

4 週間という期間については、「長い」「ゆっくり学べる」と両方の評価があったようである。

7) 望ましい実習時期と実習期間

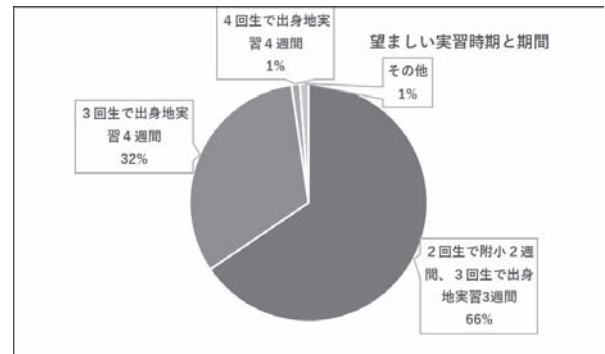


図 5 望ましい実習時期と期間

授業内で 1 週目から 4 週目までの実習内容と学んだことについて各自がメモをした内容を 4～5 人のグループで共有をさせた。その後、望ましい実習時期と実習期間について択一式のアンケート調査を実施した。

結果として、「2 回生で附属小学校 2 週間、3 回生で出身地実習 3 週間」が 66%と全体の 3 分の 2 を占めた。また、3 回生で出身地実習 4 週間という回答も 32%あり、併せて 98%という結果となった。4 回生その他については合わせて 2%と大変低い数字であり、自身が 3 回生で実習に行ったことに満足していることがうかがえる結果となった。

それぞれの理由を以下にまとめる。

### 3 回生での実習がその後の学びに繋がる

- ・ 3 回生で行くことで自分が実習で学び足りない部分を理解してさらに 1 年勉強することができる。
- ・ 実習でより教師になりたい気持ちが強くなったため、勉強するモチベーションも高くなった。
- ・ 早いうちから実務経験を積んでおくことでその分経験を活かして残りの大学生活を過ごすことができる。

### 3 回生で実習することで教師に向いているかの判断ができる

・早い時期に自分に合った、本当にしたい仕事なのかを見極めることができる。

・企業就職をめざしていたが、3回生で実習に行くことで教師になると進路変更した。  
採用試験や就職活動の準備に余裕ができる

・就活などに対して少なからず余裕がある。  
・採用試験の準備に専念できる。

#### 2 回生の附小実習に意味がある

・母校に行く前に短期間でも附属で体験しておくことで、学びたいポイントを押さえて出身地実習に行くことができる。

・附属小学校でグループで取り組むことで、恐れず経験を付けられ、3回生で2回生の反省を活かして、自信をもって実践をできるから。

#### 4 回生で実習に行くメリットもある

・実習期間中に優秀な評価を校長先生等から得られると、4回生であればそのまま学校推薦もあると聞いた。

#### 8) 将来の進路決定に実習は影響を与えたか

この設問に関しては自由記述で回答を聞いている。小学校教諭、特別支援学校教諭、その他に分けて回答内容を見ていくこととする。

##### 小学校教諭をめざすと回答した学生の記述

・3回生という早い段階で実習を行い、教師という仕事を体験できたことで、進路決定の時期が早まり、自分のすべきことが明確になったと思う。

・教育実習の前は、就活も視野に入れていたが、実習の影響で教員を目指したいという気持ちが高まり、進路を変更した。

・3回生での教育実習を通して、「絶対に教師になりたい」「早く教師になりたい」という思いが湧いてきました。教師までの道のりや、なってからの事など現実的に考えるようになりました。

・他人事のことから、自分事として捉えることが出来るようになった。

・教育実習では教師のやりがい、楽しさなど良い面だけではなく教師という仕事の大変さ、過酷さなどマイナス面になるようなことも知ることができ、より教師と言う職業をより現実的な視点から考えることができたのは良かった。教師としてのやりがいと過酷さを天秤にかけたとき、私の場合はやりがいの方が勝ったので、教員採用試験に向けての勉強へのモチベーションがより高まったと思う。

#### 8) 将来の進路

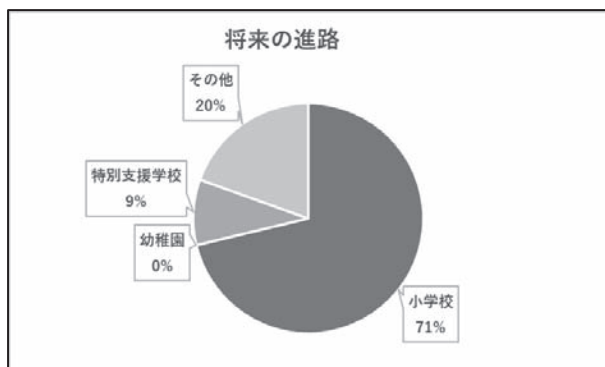


図6 将来の進路

将来の進路に関しては、小学校教諭をめざすという回答が最も多く、71%の学生が回答していた。特別支援学校は9%、その他（大学院進学、企業就職など）は20%という結果であった。なお、本調査は小学校実習に参加した実習生みのデータを対象としているので幼稚園・こども園などへの就職者はゼロとなっているが、実際には3名が幼稚園・こども園への就職を考えている。この進路の選択に実習がどのような影響を及ぼしたかを次に聞いている。

昨今の報道その他によって教師の仕事が大変な仕事であることを学生たちは十分に知識として知っている。そのうえで、実習に参加することで「教師という仕事をより現実的な視点から考えることができ」、「天秤にかけたとき、私の場合はやりがいの方が勝った」という回答が多く、多くの回答者の答えを代表していると言えるだろう。一方で教育実習に参加したことで自分自身が教師の仕事に向いているかどうか考えるきっかけとなり、結果的に別の進路を選んだという回答もみられた。以下に進路としてその他を選んだものの代表的な記述を記す。

## 教育実習の時期と期間についての検討

その他の進路を選んだと回答した学生の記述

- ・教育実習を通して、家庭環境が原因で支援が必要な子の実態を理解することができ、目の前の子どもたちだけでなく、平等な教育を提供するためにも全体を支援したいと思い行政職をめざすことにした。
- ・教科書や教材に興味を持ったので子どもの教育に何らかのかたちでかかわる仕事に就こうと考えた。
- ・教師の現実の労働環境を見て自分には向いていないと思った。

教育実習の経験を通して、教師以外の職業で教育に貢献したいと考えるようになったという声もいくつか聞かれた。また、現場で教師たちの労働環境を目の当たりにして他の進路を考えるようになったという回答も3件あった。

### 4. まとめと残された課題

実習の時期と期間を検証するために、1週目から4週目までの実習内容と学生の学びを調査しまとめてみると、週ごとの内容にかなり共通性が見られることが分かった。4週目で研究授業を行うことができると、それをめざして3週目までの実習カリキュラムを組み立てることが

可能と考えられ、より有効な実習が可能となっていることが分かった。諸外国と比べるとそれでも十分とは言えない期間ではあるが、4週間という期間には意味があると思われる。ただし、今回調査した学年は2年次での附小実習が実施できなかったため、3年次での出身地実習が小学校としては初めてで最後の実習となったという点も勘案すべきであろう。本学は附小実習2週間、出身地実習3週間で既の実習期間と定めているので、この5週間でどのように有効に使用するかを、今後附小及び出身地の実習校の教員と共に可能な限り議論し、検討を重ねていく必要があると考える。今回は2020年度生に的を絞って検証考察を行ったが、今後、教育実習の参加形態の実情に違いのある他の年次の入学生の調査も併せて行うことで、比較検討を行っていく予定である。

### 謝辞／付記

本研究の一部は科学研究費助成「教師の身体知の編みなおしを可能とするリフレクションの手法の開発と検証」（基盤研究（C）22K02321）の成果による。なお、本調査に協力してくれた教育学専攻2020年度入学生に心より感謝申し上げます。

<sup>1</sup> 坂井武司・森久佳・村井尚子・落合利佳・齊藤和貴・玉村公二彦「新しい時代の教育実習モデルの開発に関する研究：COVID-19の感染拡大下におけるオンライン教育実習の事例」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第4号、2022年、27-35頁。

および森久佳・坂井武司・村井尚子・落合利佳・齊藤和貴・玉村公二彦「初等教員養成段階におけるオンライン教育実習に関する報告：実習アンケートの自由記述式回答の結果と先行事例との比較を踏まえて」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第4号、2022年、153-159頁。

<sup>2</sup> 岩田によれば、1955年段階で小学校教員養成の課程認定を得ていた私立大学は青山学院・京都女子・聖心女子・玉川・日本女子・立教の

6校のみであった（岩田康之編『教育実習の日本的構造』学文社、2021年、25頁）。

<sup>3</sup> 本学では、他の関西地方の大学と同様に「1年生」を「1回生」と呼んでいるため、通称に合わせて記す。以下同じ。

<sup>4</sup> 文部科学省中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）基礎資料、2.（9）諸外国における教員養成・免許制度

（[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337068.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337068.htm)）2022年3月27日閲覧

<sup>5</sup> 本柳とみ子「多様性を活かす学校教育に向けた教員養成－オーストラリアの大学における取り組み－」伊井義人編『多様性を活かす教育

---

を考える七つのヒント オーストラリア・カナダ・イギリス・シンガポールの教育事例から』共同文化社、2015年。

<sup>6</sup> 本実習の成果と課題については、註1の坂井論文と森論文を参照されたい。

<sup>7</sup> 文部科学省中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（平成18年7月11日）では、「いわゆる母校実習については、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である」とされ、「一般大学・学部については、できるだけ同一都道府県内をなじめとする近隣の学校において実習を行うこととし、いわゆる母校実習については、大学側の対応や評価の客観性の確保等の点で課題も指摘されることから、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である」と書かれている。「一方、学生が自らが教職に就くことを希望する出身地の学校で実習を行う場合については、柔軟に対応することが適当である。ただし、このような場合でも、大学と実習校とが遠隔教育的な方法を工夫して連携指導を行なうなど、大学が教育実習に関わる体制を構築するとともに、実習校側も適切な評価に努めることが必要である」とされており、本学のように出身地で教員として働くことを念頭に置いている学生が

多い場合は、必ずしもその限りではないと受け取ることもできる。2年次に附属小学校での実習を行うことを勘案すれば、3年次の実習は出身地で行うことが様々な学校教育のあり様を体験するという意味合いにおいても適切であるとも考えられる。ただし、「平成30年度教職課程認定大学等実地視察について」（中央教育審議会初等教育分科会教員養成部会第106回資料、2019年7月18日）において、「実習校の選定に当たって、依然として、母校や遠隔地の学校での実習を前提としている大学等もあった」と指摘されている。遠隔地での実習であっても実習校と大学の教員との綿密な連携が必要とされている点は今後さらに検討すべき課題であろう。

<sup>8</sup> 深田博己「小学校における担任学年配置に関する女性教師のステレオタイプの態度」『広島大学教育学部紀要』第1部、第40号、1991年、87-94頁。

<sup>9</sup> 黒田友紀・杉山二季・望月一枝・玉城久美子・船山万里子・浅井幸子「小学校における学年配置のジェンダー不均衡」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第49巻、2009年、317-325頁。

<sup>10</sup> 教育職員免許法施行規則参照。